

また、この位置から約10m南の辺りでは、土師器皿の上に置かれた金銅製の飾り金具1点も出土しました。皿に飾り金具と魚介類などのお供えを載せ、重要な構築物建造のための儀式が行われたのではとみられています。これも貴重な発見です。



重ね置かれて出土した盃

上ノ郷城の実像と今後

居館としての城跡

今まで戦国時代の城は、後の時代に造られる名古屋城や姫路城などとは異なり、小規模な砦のようなものと考えるのが一般的でした。ところが、上ノ郷城は、何棟かを構えた堂々たる館であることが分かってきました。

カマドや羽釜、漁具のオモリなど生活の痕跡となる遺物や遺構も何点か見つかっています。また、祭祀が行われていた形跡も随所に見られ、数珠玉や硯片の出土も、居館の性格を色濃くしています。城主を中心とした主だった人たちは、この主郭で生活していたのではないのでしょうか。

天文13年(1544)、室町時代の代表的連歌師・谷宗牧は、鶴殿氏に招かれ上ノ郷城に上ります。そのときの様子を紀行文『東国紀行』にこう記しています。「しづかに城の山々里々、見し世にかわらぬ年を経て繁昌、所がらにや年がらにや、当国数度の忽劇(注)をも、のがれし城なり」。

(注)三河国で幾度もあったであろう

合戦

保存に向けて

発掘調査は、来年度以降も土塁や堀など範囲を広げて行っていく予定です。上ノ郷城跡の全体像を明らかにしたうえで、今後どう保存していくのか、地元の方や市民の皆さんのご意見を伺いながら検討していきたいと思っています。

発掘調査が教えてくれるもの

上ノ郷城跡を愛する会 会長 足立泰敏



4回の発掘調査を重ね、主郭部分の全貌が明らかになった今回。多くの研究者に「これほどまで壊れず当時を残している城跡は、全国屈指のもの」と言わしめるほど。まさに、4百有余年の時を越えてのご開城である。

知将徳川家康をして、難攻不落の城としてその名を止めてきた当城は、これまで名声が先行する幻の城的存在であった。しかし、発見された火縄銃の弾丸が、落城時に使用されたものとするなら、鉄砲隊が活躍した長篠の戦より13年も前となり、鉄砲の伝播や発展に一石を投じることになりはしないか。また、ていねいに重ねられて出土した杯が、落城前夜のものであるなら、鶴殿氏一族からの幾多のメッセージがそれらに塗り込められているのでは。そして、井戸やカマド、排水溝などの発掘は、当時の生活の臭いを鮮烈に漂わせている城として、武將に加え女・子どもの往来さえ感じさせる。

発掘調査の分析が進むにつれ、幻のペーブルは、胸ときめく郷土の至宝へと近づいていく。楽しみ、期待、この上ない。

最後に、雨天・炎天のもと、発掘調査に邁進された日本考古学協会の小笠原久和さんを始め関係者の皆さん方のご苦勞に感謝申し上げます。